

火星



800号記念号

平成18年9月号

七曜抄 (三)

山尾玉藻

杖先を押ししかへしたる梅雨茸

花合歡に水嵩ぐんと増えゐたり

鉾立の繩のほへる昼の闇

瑠璃とかげ昼酒いよよさびしかり

今日の眉引き終へにけり雲の峰

苦瓜を朝昼晩と食うべけり

踊よりもどり大梁うつぱりの下

冬そよご青の木蛇の匂ひのしてゐたり

遠花火筆舐めて筆をさめけり

闇のまだ一つとならず花火あと

鉄の扉の好きなるうすばかげろふで

南瓜の腸搔き出せり夏の風邪

白日傘新京極の蛸食べに

梅の木に梅ののこれる星祭

早稲の香にあんぱんバナナ持ち寄れる

星流る砂にもぐれる魚たちに

躓いて一人なりけり吾亦紅
からつぼの花筒たどる秋の蜂
大鍋に蝦蛄茹で上ぐる野分あと
豇豆棚壊すあとさき日照雨
踏切の音の花野に遊びけり
月の出へとび出してゐる蓮の実

雨 上 が る

大山 文子

雨音に山羊の乳張る二月かな
末黒野に放ちし犬のすぐ戻る
対岸の煙の届く古巢かな
日輪は丹波へ移り百千鳥
山焼いて戻りし父の手ぶらなる
門柱に紙の表札夕桜
花の雨孔雀高みに止まりをり
桜餅八重の色ぞと思ひけり
堅香子や帽子の濡るほどの雨
春落葉ぬた場の縁に立ちてをり

800号記念「圭岳賞」
恒星圏同人の部第一席

酒蔵に目の慣れて来し花の昼
葎切の辺りへ帽子押さへつつ
前うしろ川の流るる鱧料理
づぼらやの大提灯や秋燕
昼の虫終着駅は始発駅
橙の大木にして雨上がる
てつちりを食うべて傘を忘れたり
大年の昆虫館に日の斑
風花や動物園の裏通る
猟犬の気配ありたる幌の中

800号記念「圭岳賞」
恒星圏同人の部第二席

良寛忌（抄）

深澤 鱒

けものらとおなじ芽を食ぶ良寛忌
うすらひに裏のありけり花のごと
よき土のところ雪消の鮮しき
わたつみに近き雪間を眩しめり
うからやからが春炬燵まさぐりぬ
国上山酸葉のつかれ濃くなりぬ
良寛の軸のほつれや海雲桶
杜若兄の白髪増えやすし
角突きの牛静かなる山桜
良寛の脛の薄さや稲の花

800号記念「圭岳賞」
恒星圏同人の部第三席

亀の鳴くまで (抄)

戸栗 末廣

大 初 日 海 引 っ ぱ っ て 上 り け り
鶏 小 屋 に 兎 も ゐ た る 冬 休
恋 猫 に 闇 あ を あ を と あ り に け り
板 の 間 に 老 女 が 座 る 種 物 屋
春 泥 の よ ろ こ ん で ゐ る 木 杵 か な
ぶ ら ん こ に 腰 掛 け て 待 つ 同 窓 生
満 開 の 花 に 機 嫌 の あ り に け り
身 ほ と り を 瀧 の 風 の 過 ぎ ゆ け り
先 生 は 亀 の 鳴 く ま で 待 つ と 言 ふ
山 の 日 の 移 る ひ や す し 錨 草

よもぎ餅

坂口夫佐子

よもぎ餅持つて遅れてきたる人
箆をもつ人と見てゐる朝桜
花の昼母の手を引く父がゐし
薄紙を背紋にはさむみどりの夜
春落葉らしからぬほど盛りあがり
叱る声うしろにありて土筆の野
はぶり火の音のしてゐる初桜
清滝の豆腐揚げきし春の昼
追ひかけて傘さしかける花馬酔木
紅梅に近づきたれば天守閣

800号記念「圭岳賞」

一般の部第一席

枯蔓に種のびつしり藪の雨
青楓栗鼠の来てゐるレストラン
宵の灯のバケツに一本菖蒲かな
帆と夫のシルエット立つ春の沖
遠浅のにぎはひ抜けて緑立つ
梅雨の夜のひるがへる葉の白さかな
脳天の傾くカーブ百日紅
料亭の塀のべんがら亀の鳴く
違ふ来て潮の和布のすきとほる
水打つて山の容の引き締まる

太白星

柳生千枝子

応接間塵ひとつなし百合ひらく
接点となるまひる野の百合ましる
夏がすみ銀座通りに浴き陽
夏霞故郷の山河寂として
日盛の出窓に見えて百合の白
水あたりして姑眠る覚ますまじ
水中りしてより少女透きとほる

杉浦典子

坂の上に祭支度の水流る
まむし食ぶ通天閣の影の中

港行きゼロ番線の西日かな
睡蓮の葉裏の紅を風渡る
竹の子と寄り道せずに帰り来し
涼しかり同じ長さの夫婦箸
築番のこゑ低く水渡りくる

浜口高子

金魚玉手櫛にかわく洗ひ髪
竹皮脱ぐわが家の姫の靴大き
涛音に開けつぱなしの蟬の穴
地の底を見てきし山椒魚の貌
京の裏鬼門の寺の唐辛子
滝しぶき浴びてからだの浮き上がる
軟骨をスーぷに仕立て星涼し

火星作品

山尾玉藻選

釣り上げし魚のつめたき梅雨晴間
八幡 大山文子

傘の柄がひつばつてゐる桑苺

青梅雨の夜の大阪観覧車

通天閣近くて見えぬ朝曇

青い鳥庭に来てゐる朝ぐもり

レース編むうちに大人になりけり
穴栗 田中英子

荒縄を水に浸せる夏越寺

日は不意に落ちけり烏瓜に花

棒立ちの父暮れなづむ夏燕

シヤンパンはまつ赤な薔薇に冷すべし

麦秋の一戸に着きし救急車
八幡 丸山照子

月光の触れてゐるなり草螢

ビリケン頭のとんがれる日の盛

老鶯や風のわたれる一軒家
青梅雨に浮かぶ二階の窓に顔
あめんばう水のたわみを引つぱれる
父の日や杉は真つ赤な脂やにを吐き
栗の花咲いて素性は知らざりし
けふ夏至の放下のごとく森に入る
蛇苺ひとを疎みてさびしめる
父の白湯すぐに沸きけり遠蛙
ちちははの色あるものも曝しけり
生きてゐる魚に串刺す雲の峰
水中花水の重みにひらきけり
さびしさに増やしをりけり日向水
けふよりは二階へあがる金魚玉
脇道に馬つなぎあり山開
伊勢人に渡板のしなる生簀舟
八重山を取り囲みたる梅雨入かな
鱸綱を渡つてをりし蝸牛

八幡飯塚系子

大和郡山城孝子

明石戸栗末廣

選のあとに

山尾 玉藻

釣りあげし魚のつめたき梅雨晴間

大山 文子

梅雨の晴間は一見爽快そうだが、現実には蒸し暑く、不快指数は最大である。文子さんは釣りが上がつてくる魚に生温さを予感していたが、実際には冷たかったのである。考えて見れば当然の事であるが、この感覚が詩となるのである。

栗の花初めて見し日弟逝く

波田美智子

へこれが母の死ぬ夜か星のうつくしき 差知子 親兄弟などの死に遭遇すると、普段何気なく見ていたものに、強い印象を受けることがある。美智子さんの遭遇はまして逆縁である。「栗の花」は独特の匂いはするが、地味な色で目立たない花である。弟さんの逝かれた後は、毎年「栗の花」にこころを寄せられているのであろう。

葦咲いて生命保険満期くる

高尾 豊子

葦の花は地味ながら純白で可憐である。生命保険の満期のささやかな幸せには「葦の花」がよく似合う。恐らくご主人の定年どき辺りが満期だったのであろう。ささやかな幸せと言ったが、生命保険の満期は主婦にとって嬉しい重大事でもある。

陳情に行く凌霄の花くぐり

山田美恵子

主婦が陳情に行くとするれば、自宅近くでの不健康な遊技場の建設反対運動などが想像される。「凌霄の花」は、暑く気だるく、倦怠感を思わせる花である。その花をくぐることで、陳情に行く気持を奮い立たせているのである。

漬茄子や夫の背中に朝日射す

重見 久子

夫婦の営みのあつた翌朝の句として取上げた。もしかすると読み過ぎかも知れないが、この読み以外では作品として成立しない。「漬茄子」の紫紺色は艶である。今朝の「夫の背中」は男の背中である。

鮎好きの祖母の願思ひをり

藤田 素子

こう言う句を見ると俳句形式のもつ力を感じる。共通体験の部分が大きく省略されているのである。この句の生命は「願」と「う」一字に尽きる。「鮎好き」であつた祖母は、頭と尾を両手で孤み、最も好きな簞簞からかぶりつかれたのである。素子さんには祖母の願が喜んでるように見えたのである。

サングラス似合ひしままに老いしかな

山田 和子

縁日などで、歳とつて痩せた香具師の腕にちらつと刺青が見えることがある。痩せた体の刺青は哀れで悲しい。この句の「老いしかな」にも悲しみがある。確実に体の衰えは見えるが、サングラスだけが不思議に似合っているのである。

恒星圈

戸栗末廣

父の日といふしづけさのいつよりぞ
玉葱を妻の高さに吊しけり
落人の村に螢火しぶきけり
子つばめの声しきりなる義士の墓
はらからへ文書き直す青葉木菟

戸田春月

半音を曳きずる唄やゴーヤ成る
女下駄置かぬ玄関梅雨の月
南風吹く蹲の辺の鴨足草
蛇の目草むかしのことはよく憶え
封切らぬままの香水巴里祭

子を欲らぬことも生き方めだか飼ひ
もう居ぬと思ひし蜥蜴走りけり
緑蔭や足の短き犬ばかり
螢火のふくらみきつて消えにけり
玉葱を両断したる夕あかり

野澤あき

点眼や落ちてきさうな夏の月
縞馬の縞のよろける三尺寝
検診を遠ざけてゐる簞
あめんばう触れては離る雲に乗り
死にかはり建ちかはりせし花ざくろ

波田美智子

ふたり共無頼になれず初鯉
青葉風パン工場ガラス窓
レモン咲く枝の間より金剛山
氷見よりの黒部峽谷夏霞
子の絵本胸に伏せある昼寝かな

獅子座

山尾玉藻推薦

天谷翔子

ジーパーンの女泣きををる滝の前
真夜中の女三人枇杷すする
マニキュアの人差し指を滴りに
舟虫のぶつかりし音聞きにけり

加藤廣子

菊水楼より差しかけられし梅雨の傘
救急車の音の過ぎたり茗荷の子
鱗壁に影を落せる萩青し
梅雨最中CTスキャンくぐりゐる

藤田素子

ひまはりを羨ましいと思ふ日も
病院の廊下分かれる大西日
あぢさゐの咲き続きゐる暑さかな
さくらんぼ記念日いつも雨がちで

松井倫子

梅雨兆す壁のメニューを仰ぎけり
月光のしづくためゐる銀竜草
阿闍梨笠の一つ飴色薄暑光
放生の稚魚緑蔭に混み合へり

長田暉子

猫嗅いでなにごともし昼蚊遣
家猫のかすかないびき蘭座布団
かすかなるモーター音に蚊遣香
影を出で影濃くしたり黒揚羽

河崎尚子

ドリアンと蠅と女の小舟去る
オフェリアの溺れてゐさう夏あざみ
ソムリエのコルク飛ばしぬ夕立晴
夏鴨の小さく鳴きて雄ばかり

垣岡暎子

草引いて引いて心を立てなほす
をのこの名ばかり考へ花胡瓜
長梯子ねかせて久し更衣
螢の夜へつづく道ありにけり